

派という外ない。三十年から四十九年三月逝去までの深志在職時代、病いと闘いながらの報告・論文は百を越えている。縄文研究に情熱を傾け尽くした藤沢の墓は、ただ一字「道」と刻まれている。

## 八 知る楽しさ、大衆に

中世都市の研究者、原田伴彦(昭9年)は、国民新聞の記者から教師、ジャーナリスト(地元紙のコラム執筆)、学者と幅広い体験を持つ。それが研究成果の発表にも生きており達意の文章家でもある。たとえばその著「長崎」。中世の終わりに長崎村として誕生した小さな村落が、鎖国時代に中国、ヨーロッパ、東南アジアとの接点となって繁栄し、日本の都市の中でもユニークな性格をもつようになった歴史を硬軟とりまぜて精細に、しかもすばらしいストーリー・テラーとして浮き彫りしていく。研究を深めながら大衆に判り易い形で知識を還元していくことは学問を志す者にとって忘れてはならぬことだが、原田は、よくその負託にこたえている。主な著書は「中世における都市の研究」「日本封建都市研究」「関ヶ原合戦前後」「木曾・信濃路の魅力」「日本女性史」「茶道太平記」とまことに多彩である。大阪市大教授。

文化大革命、林彪失脚、周・毛時代の終焉、四人組追放……中国にひとたびことが起こればテレビや新聞・雑誌で背景説明から展望を含めて縦横に評論活動を繰り広げるのが中嶋嶺雄(昭29年)である。最初に著したのが「現代中国論」。文化大革命で紅衛兵の

る黒田は、信州の歌壇の一角を担い、大勢の弟子たちを育て続けている。

俳句では、藤岡筑郎(昭16年)が大きな業績を挙げている。「竜胆」誌を主宰するかわら長野県俳人協会事務局長、信毎俳壇選者として活躍している。昭和五十一年には「信濃路の俳人たち」を書きおろしたが、信州出身、または信濃とかかわり深い俳人を網羅し、その人と作品を紹介、後世に残る労作と高く評価されている。句集「姨捨」「蒼滴集」、主な著書に「信濃歳時記」がある。五十一年から文芸同人誌「屋上」の代表でもある。

川柳では、石曾根民郎(昭3年)の存在が光る。松本に腰を据えて息の長い活動を続けているが、主宰する「川柳しなの」は昭和五十一年七月「四百号」を数えた。松中時代に古川柳に触れ、以来「わが人生のよりどころとして勉強を続けてきて本当によかった」と振り返っているが、地道な分野だけに石曾根の功績は格別なものがある。「古今田舎博」(江戸時代に松本で発行された川柳句集)の研究家でもある。著書は「川柳を知るころ」「川柳の話」「川柳手ほどき」「古川柳信濃めぐり」、編著は「自選川柳年刊句集」「現代川柳展望」など。句集の主なもの「大空」と「山彦」。

## 十 テレビに新しい風

昭和のマスコミを特徴づけるものは活字から映像へ、つまり「テレビ時代」ということである。わずかに二十余年で生活に浸透

動向が注目されたとき、中嶋は単身中国に飛んだ。彼の目を見た中国報告はジャーナリズムで異彩を放ったものだった。現在東京外語大教授。著書は「中国像の検証」「現代中国入門」「現代世界と中国」など。

日本近代は、地方主義の排除・抑圧からおこったという斬新な仮説を提出し、戦前の超国家主義や、超克できなかった近代の由来などを説きあかした「地方主義の研究」の著者が三輪公忠(昭22年)。「松岡洋右―その人間と外交」「日本文化の変容」(共著)、「西洋の衝撃と日本」(同)、「日米関係の意識と構造」などが母校の図書館に並んでいる。

## 九 短歌・俳句・川柳の道

「松中二年の時、副読本に子規、赤彦、左千夫の作品がありましてね、それに触発されて自分でも歌を作るようになったのです。卒業の時、『校友』に俳句や短歌を発表したことを覚えていますよ」と話すのは歌誌「比牟呂」を主宰する黒田英雄(昭5年)。教師になってからもずっと歌をつくりつづけていたが、昭和七年、土屋文明との出会いが惹々この道に精進する覚悟を固めさせた。その時、土屋文明は、黒田の歌を高く評価してくれたのだった。太平洋戦争下、用紙不足で「アララギ」は分散発行を余儀なくされたが、甲信越は「甲信越アララギ」となり、やがて「比牟呂」になった。森山汀川、伝田精爾を経て、黒田は三代目の主宰者である。「歌の道は真実を追求することに尽きる」と言い切

しきついているだけに、いわゆる俗悪番組批判や報道のあり方等について反省や警鐘を鳴らすものも多い。そのような状況の中で、優れた番組を送りつづけているのがテレビマンエナオンの萩元晴彦(昭24年)である。

彼の番組づくりの合言葉は「面白くて、ためにもなるもの」である。だが言うは易く、これほど難しい制作はない。単に面白いだけだったり、ためにならなかつたり番組が多過ぎるのが放送界の現状なのである。それに敢然と挑戦しつづけている萩元は松中時代、野球部のエースとして甲子園のマウンドを踏んだだけあって、あえて困難に立ち向かう気概の持ち主なのである。映像に賭け、しかもその夢を着々と実現させている点、卓越した制作者の面目躍如たるものがある。

映像時代の先端をゆく萩元の制作は数多くの話題作を生み、たくさんを受賞に輝いた。民放祭賞、芸術祭賞、ギャラクシー賞、テレビ大賞などまことに多彩で、五十一年には芸術選奨文部大臣賞も受けた。ちなみに萩元はTBS入社二年目の民放祭でラジオの録音構成「心臓外科手術の記録」が入賞を果たしている。その後、「小沢征爾第九を揮る」「あなたは……」「日の丸」などテレビ・ドキュメンタリーの演出に新しい方法を切り開いていった。

四十五年、テレビ状況の変革を目指す十三人のディレクターがTBSを集団退社、「テレビマンユニオン」を発足させた。「遠くへ行きたい」「オーケストラがやって来た」「ハロー! スポーツ」「対談ドキュメント」など優れた番組が続々オンエアされていった。この間、ユニオンの社長として萩元は才腕を振るった